

「魏志倭人伝」を考える

—数値について—

塩田 泰弘

1 里数と日数

(1) 「魏志倭人伝」の距離観

「魏志倭人伝」は、帯方郡から邪馬台国までの行程を示す詳細な里数をはじめ様々な数値が記載されている。本項ではその数値について考えてみる。

帯方郡から邪馬台国までのこの里数については、信用できない、虚妄の数字であるとの批判がある。それは、「魏志倭人伝」における国から国までの行程に記された里数が、魏・晋の当時の里や「魏志烏丸鮮卑東夷伝」(以下「魏志東夷伝」という。)^{うがんせんびとういいでん}のうち、「魏志扶余伝」^{ふよ}、「魏志高句麗伝」^{こうこうり}、「魏志沃沮伝」^{よくそ}、「魏志挹婁伝」^{ゆうろう}に上げる扶余、高句麗等の国々の国の広さや国邑間の距離等を示す里数と比べて全く異なっていること、「魏志倭人伝」における国から国までの里数も現在の距離と比べてみると、同じ里数であってもまちまちの距離であることなどがその理由となっている。

「魏志東夷伝」に記された扶余、高句麗等の各国において用いられている距離観について、「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」を除く各国の条に記載された距離を示すと表1のとおりで、一里は、最小二百二十メートル、最大四百三十メートル、確定距離の平均距離観はおおよそ三百四十メートルで、不定距離(可や余を伴う)を含めた距離観はおおよそ三百二十メートルとなる。当時の魏・晋の一里は、約四百三十四メートルと言われており、これよりは短い、測量技術が発達しておらず、また、実測したものでもないことを考えると概ね当時の魏・晋の里を使用していると考えていいであろう。

なお、「魏志韓伝」における距離観は、「魏志倭人伝」と同様であることから「魏志倭人伝」の項に含めて述べる。

表1 「魏志東夷伝」の距離観(「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」を除く)

	東夷伝の2点間距離	確定距離	不定距離	距離観
夫余伝 <small>ふよ</small>	玄菟郡治 ↔ 夫余国邑 1,000 里	360 km		360m/里
	夫余の国土範囲 方 2,000 里可り	国土範囲不明確で計測できず		
高句麗伝 <small>こうこうり</small>	遼東郡治 ↔ 高句麗国邑 1,000 里	400 km		400 m/里
	高句麗の国土範囲 方 2,000 里可り		440 km	220 m/里
沃沮伝 <small>よくそ</small>	高句麗国邑 ↔ 東沃沮主邑 1,000 里	250 km		250 m/里
	東沃沮地域の西南長 ↔ 1,000 里可り		280 km	280 m/里
挹婁伝 <small>ゆうろう</small>	夫余国邑 ↔ 挹婁主邑 1,000 余里		430 km	430 m/里
濊伝 <small>わい</small>	距離に関する記述は見られない			

夫余伝から挹婁伝までの確定距離の平均距離観はおおよそ「340m/里」であり、同じく不定距離(可や余を伴う)を含めた距離観はおおよそ「320m/里」である。

注 「邪馬台国への径―「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう」(榊原英夫)から「魏志韓伝」を除いた。

「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」における距離観について、「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」に挙げられている、国々から次の国々までの里数及び国の範囲を示す里数を上げると、表2のとおりで、一里は約八十六～八十七メートルとなる。表1の「魏志東夷伝」の「魏志扶余伝」、「魏志高句麗伝」等に上げる距離観とは全く異なる数値で、両者は全く別の基準によるものと考えざるを得ないのである。すなわち、陳寿は、「魏志東夷伝」のうち「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」の距離観については、その他の「魏志扶余伝」、「魏志高句麗伝」等とは全く別の基準を使用しているのであって、「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」の行程は、この基準を使用しない限り理解できないのである。

「魏志倭人伝」の一里が当時の魏・晋の一里と異なることを以て、「魏志倭人伝」における国々から次の国々までの里程は信用できないとすることは、「魏志倭人伝」の理解を困難にするだけである。

表2 「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」の里・キロメートル換算表

事 項	「倭人伝の記述	実際の距離 (中数)	1里は何メートルか
帯方郡(開城)～狗邪韓国(鎮海) (あるいは南し、あるいは東す) 韓(「魏志韓伝」による。)	7,000 余里 方 4,000 里	580 k m～680 k m (630 k m) 半島南辺約 320 k m (320 k m)	90m 弱 80m
狗邪韓国(鎮海)～対馬(鹿見) (一海を渡る)	1,000 余里	80 k m～110 k m (95 k m)	95m 弱
対馬(鹿見)～壱岐(原の辻) (一海を渡る)	1,000 余里	80 k m～120 k m (100 k m)	100m 弱
対馬島	方 400 余里	南北 82 k m 東西 18 k m (50 k m)	125m
壱岐(原の辻)～末盧国(呼子町) (一海を渡る)	1,000 余里	47 k m～57 k m (52 k m)	52m
壱岐島	方 300 里	南北 17 k m 東西 14 k m (15.5 k m)	52m 弱
(小計)	(14,700 里)	(1,262.5 k m)	(86m 弱)
末盧国(呼子町)→伊都国(怡土)	500 里	53 k m	106m
伊都国(怡土)→奴国(那珂川町)	100 里	16.5 k m	165m
合計	15,300 余里	1,332 k m	87m

(注) 「奥野正男著作集 I 邪馬台国はここだー吉野ヶ里はヒミコの居城」(奥野正男)を基に、韓、対馬島及び壱岐島を加えて作成した。また、表の那珂川町は現在那珂川市となっている。本表では奴国の国邑は「奴国(那珂川町)」とされているが、大方の説は、奴国の国邑は春日市(須玖岡本遺跡)付近とされている。

また、「魏志倭人伝」の里数については信用できないとの主張は、表2のとおり各区間の一里当たりの数値が最少約五十二メートルから最大百六十五メートルであるなど様々であることもその理由の一つである。信用できないと主張する研究者のなかには、末盧国(唐津市桜馬場遺跡付近)から伊都国(前原市^{いと}怡土付近)までと伊都国から奴国(春日市須玖岡本遺跡付近)までを共に約三十キロメートルとし、五百里とその五分の一の百里が同じ約三十キロメートルとなることを理由の一つにあげ、「魏志倭人伝」の里程は、虚妄の数字であるとされた。推測するところ、JR九州の鉄道の営業キロをもとに測定されているようである。JR九州の営業キロでは、唐津駅(唐津市。末盧国)から筑前前原駅(前原市。伊都国)までは二十九.九キロ、JR筑前前原駅から福岡市営地下鉄経由でJR春日駅(春日市。奴国)までは三十.四キロでほぼ主張のとおりである。鉄道は、その多くが海岸線を通っている。唐津駅から福岡市までの海岸線は、背振山地から北に延びた山塊が海岸まで延び、そのまま海に落ち込んでいる。さらに当時は、海岸線が現在よりも深く陸地に食い込んでおり、現在海岸沿いとなっているところは多くが海であって、人が通る道を設けることは困難であった。海岸線を通る鉄道は、海岸線が後退し陸地が大きく海側に拡大した近代に、さらに崖を削り、トンネルを穿って敷設されたものである。当時の末盧国から奴国への主要道路は、山麓を回り、峠を越えていく道であって、これによると上記の表2にみるとおり、末盧国(呼子港)から伊都国(前原市)までは約五十三キロメートルで、このうち呼子港と末盧国の王墓とされる唐津市桜馬場遺跡付近の距離は約十三キロメートルであるので、五十三キロメートルから十三キロメートルを差し引くと、末盧国から伊都国までは約四十キロメートルとなり、「魏志倭人伝」にいう距離観(一里は約八十六メートル)に直せば約四百六十五里である。伊都国(前原市怡土)から奴国(那珂川町)までは約十六.五キロメートル、約百九十二里であり、同じ距離ではないのである。なお、通説では奴国は春日市の須玖岡本遺跡付近とされているのでそれで見ると、奴国(春日市)までは約二十キロメートル、約二百三十二里(拙稿「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」参照)である。参考までに博多湾周辺の埋設過程図を掲げる。弥生時代は博多湾が現在の海岸線よりも大きく湾入し、福岡市の広範囲が海中にあったことが分かる。

図1 博多湾周辺の埋設過程図

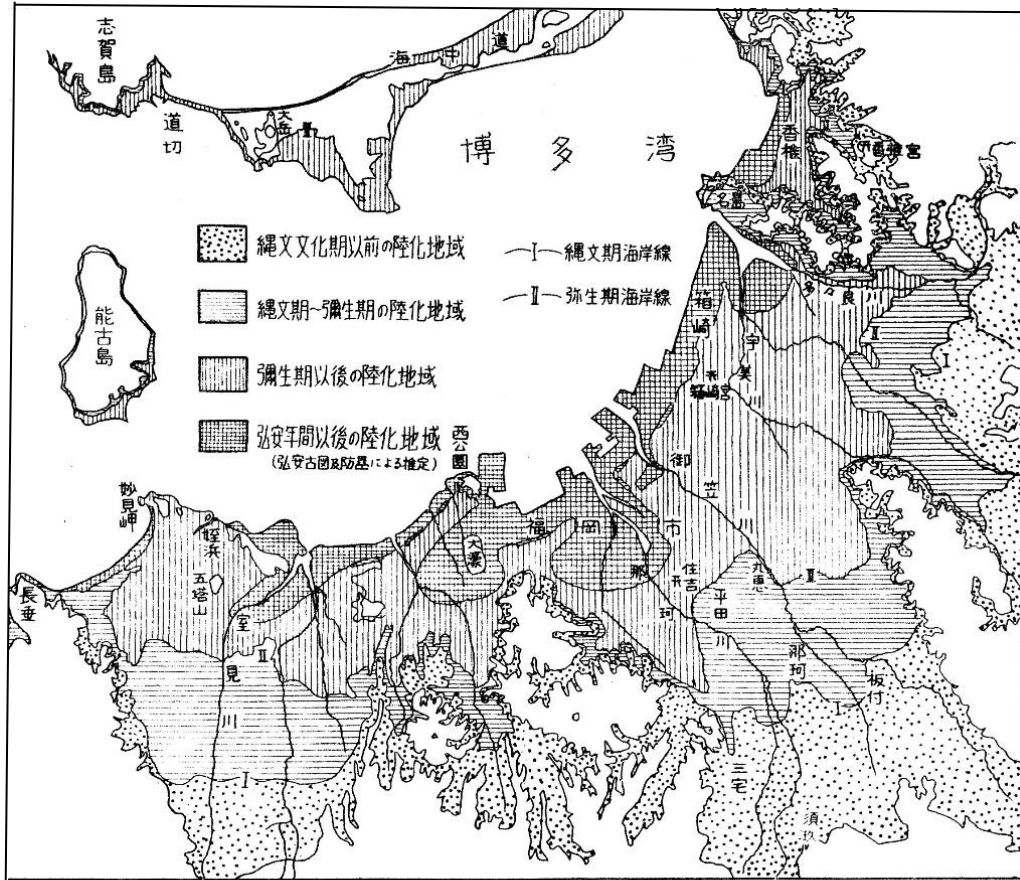


図120 博多湾の埋積過程

注 「新福岡県の地理」(著者代表 樗木昇一 光文館 1974年)による。

古代においては、測量技術が発達しておらず、実測したものでもないことを考えると表2における程度の差は、やむを得ないのではないかと考える。また、この中で、「末盧国(呼子町)から伊都国(怡土)」までと「伊都国(怡土)から奴国(那珂川市)」までは国境や国邑、辿った経路が明確になっているわけではなく、距離の基点、経路、終点が明確ではない中での数字であることから、この二つを除くと、一里は八十六メートル弱となり、最少約五十二メートルから最大百二十五メートルで、二・四倍の差である。信用できない数字、虚妄の数字であるとするほどのことはないと考える。

「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」に使用されている一里約八十六メートルは、当時の魏・晋の一里約四百三十四メートルの約五分の一である。約八十六メートルしかないところを一里と表記することにより、陳寿は、「魏志倭人伝」及び「魏志韓伝」を読む宮廷人や知識人に倭国の国々の大きさや国々までの距離を五倍に拡大して理解してもらうように仕組んでいると考えている。

なお、表2では帯方郡からの出発地(おそらく水行の出発地)を開城付近と推測されて

いるが、私は海州と推測し、帯方郡治はピョンヤンの南にある沙里院付近と考え、沙里院から海州までは陸行したと考えている。また、奴国の中心は那珂川町（おそらくは現在の那珂川市安德台遺跡付近と推測）とされているが、春日市（須玖岡本遺跡付近）と考える研究者が大勢である。私は、弥生時代後期（三世紀中ごろ）には、須玖岡本遺跡付近から福岡市（那珂・比恵遺跡付近）に移っているのではないかと考えている。

（2）万二千余里

「魏志倭人伝」には帯方郡から邪馬台国までの里数について「(帯方)郡より女王国に至る万二千余里」と記している。この数値は、帯方郡治から女王国（この場合の女王国は、女王が都する邪馬台国）までの総里数である。この数値は、表2の帯方郡から不弥国までの各行程の里数に不弥国から邪馬台国までの里数を加えたものであるため、これも実際の距離の五倍に拡大して理解してしまうよう仕組まれていることとなる。

「万二千余里」には水行と陸行による行程が含まれている。水行は、帯方郡（開城）から狗邪韓国（鎮海）までの七千余里、狗邪韓国から対馬国まで、対馬国から一大国まで及び一大国から末盧国までの各千余里で合計万余里である。陸行は、帯方郡治の沙里院から航海に出航する港である開城までの陸行の行程、九州本土の上陸地点である末盧国（呼子港）から伊都国までの五百里、伊都国から奴国までの百里、奴国から不弥国までの百里、不弥国から邪馬台国までの行程の合計で二千余里（万二千余里一万余里＝二千余里）である。

なお、表2では水行の起点は開城とされているが、私は水行の起点は海州と考えているので、以下は起点を海州として話を進める。海州は、開城の西方、京畿湾の北辺の奥まった湾岸にあり、開城とはほぼ同じ緯度（38度付近）である。当時の航路を推測することは困難であるが、水行の起点を海州とすると七千余里の行程は、帯方郡の海州から海岸にそっていったん南東方向に進み、仁川付近から朝鮮半島西岸に沿って南下し、半島の西南端から南沿岸に回って狗邪韓国までの行程の里数である。

陸行の「二千余里」には、帯方郡治の沙里院から航海に出航する港である海州までの陸行の行程と九州本土の上陸地点である末盧国（呼子港）から邪馬台国までの行程である。このうち沙里院から海州までの行程については、表2には表記されていないし、大方の行程論では取り上げられていない。魏使が命を受け、倭国に向かって出発するのは帯方郡治がある沙里院であるため、沙里院から海州までの行程も陸行の「二千余里」に含まれていると考える。この行程は帯方郡内の行程であることから十分に周知されている行程であり、これを五倍に拡大して理解するよう仕組むことは、直ちに露見することになるのでこの行程は魏・晋の里を使用していると考えられる。沙里院から海州までの距離は、約七十七キロメートル（グーグル地図による。）であることから、魏・晋の里では約百七十七里である。二千余里から約百七十七里を差し引いた千八百二十三余里が倭国内の行程であり、これについては表2に示すとおり、魏・晋の里は使用されておらず、五倍に拡大して理解するよう

仕組まれているのである。さらに、「魏志倭人伝」に明記されていない不弥国から邪馬台国までの行程は千二百三十三里となる（二千余里—約百七十七里（沙里院から海州）—七百余里（末盧国から不弥国）＝千二百三十三里）。なお、一里を八十六メートルとすると約九十七キロメートルとなる。

2 このほかの数値

(1) 水行十日陸行一月

a 水行十日

「魏志倭人伝」に記された帯方郡から邪馬台国までの行程の里数は帯方郡内の行程を除いて実際の距離の五倍に拡大して認識されるように仕組まれているのではないかとの考えが得られたが、試みにこの観点からこのほかの「魏志倭人伝」に記された数値についても考えてみる。

「魏志倭人伝」のなかには、重要な数値がある。「南、邪馬台国に至る。女王の都する所、水行十日陸行一月」の「水行十日陸行一月」である。この数値は、帯方郡から邪馬台国に至るまでの所要日数を示しているものであるが、これも五倍に拡大して理解されるように仕組まれているのではないかと考える。この観点から考えてみたい。まず、「水行十日」である。これに関する「魏志倭人伝」の記述は、「郡より倭に至るには海岸に循^{したが}って水行し、韓国を歴て、^{あるい}乍は南し乍は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里。始めて一海を渡る千余里、対馬国に至る。（中略）また南一海を渡る千余里、（中略）一大国に至る。（中略）また一海を渡る千余里、末盧国に至る。」となっている。この行程のうち、狗邪韓国から対馬国、対馬国から一大国、一大国から末盧国までは海を渡るのであって、途中で停泊ができる島嶼はなく、さらに夜間の航行は日中の航行よりはるかに危険を伴う。出航したら目的地まで日中のうちに一気に渡らねばならない。そう考えると狗邪韓国から対馬国、対馬国から一大国、一大国から末盧国までの海を渡る各千余里は各一日の行程であり、計三日を要することとなる。「水行十日」から三日を差し引くと残りは七日である。帯方郡の海州から狗邪韓国までの行程は七千余里でこの航海に要する日数は七日となる。この七日も実際にかかる日数であろう。

b 陸行一月

次に「陸行一月」であるが、この日数で進む里数にして二千余里は、帯方郡の郡治である沙里院から海州までの陸行と末盧国から邪馬台国までの倭国内の陸行とに分けられる。沙里院から海州までの陸行は、約七十七キロメートルで魏・晋の里数で約百七十七里である。この里数は帯方郡内のことであり、五倍に拡大する余地はない。時代はかなり下るが、唐時代の律令制度を記した「唐六典」によれば、一日の歩行距離は五十里、馬によれば七十里とされている。唐代の一里は五百六十メートルであるので、一日の歩行距離は二十八キロメートル、馬の場合は三十九キロメートルとなる。七十七キロメートルは、これを二

十八キロメートルで割れば、二.七五となり、徒歩では二.七五日、すなわち三日かかることになるが、この行程は帯方郡内であり、馬を利用したと考えられる。馬を利用すれば一.九日（二日）である。「一月」から二日を差し引くと二十八日となる。この二十八日は末盧国から邪馬台国までの倭国内の日数であり、五倍に拡大されていると考えると、実数は五分の一の五.六日となり、六日である。帯方郡内の里数は約百七十七里であるので、二千余里からこれを差し引いた千八百二十三余里（一里は約八十六メートルであるので約百五十六.八キロメートル）が末盧国から邪馬台国までの里数である。この里数を六日で進むこととなるので、一日の里数は約三百四里、約二十六キロメートルとなる。「唐六典」による一日の徒歩行程の二十八キロメートルと大差はなく、倭国内の行程、千八百二十三余里に要する日数六日はおおむね妥当なものであることが推測される。

因みに倭国内の行程に要する日数を六日とし、一日平均二十六キロメートル進むとして、「魏志倭人伝」に記述されている行程を推測してみる。末盧国（上陸した呼子）から伊都国までは五百里、五十三キロメートル（表2）であるので途中で一泊して伊都国に至り、宿泊する（計二泊二日、五十三キロメートル）。伊都国から奴国までは百里、十六.五キロメートル（表2）であるので、ここは休憩するだけで通過して到着した次の不弥国で一泊する。奴国から不弥国までは百里である。表2には記載がないので不弥国を宇美町（町役場所在地付近）として地図上で奴国からの行程を推測し測定すると約十キロメートルである（累計三泊三日、七十九.五キロメートル）。翌日不弥国を出発してから二十六キロメートル付近で宿泊する（累計四泊四日、百五.五キロメートル）。翌日出発して二十六キロメートル付近で宿泊する（累計五泊五日、百三十一.五キロメートル）。翌日出発して、二十五.三キロメートルで邪馬台国に至る（累計五泊六日、百五十六.八キロメートル）こととなる。

なお、実際の行程においては当然のことながら魏使は、雨が降れば好天気になるまで出発を見合わせたり、宿泊地の国々の首長から饗応を受けて逗留したり、国々の視察をしたりしながら、ゆるゆると進んだことは言うまでもない。休憩するだけで通過するとした奴国においても、青銅器、ガラス製品、鉄製品等の倭国における最先端技術のテクノポリスと称されるほど隆盛していた須玖岡本遺跡付近、博多湾岸の貿易港など奴国内をつぶさに視察したことであろう。これは水行についても同様である。到着した港で、天候待ち、潮待ち、風待ちしたであろうし、水夫の休養、水・食料の積込みなどのほか、対馬国、一大国の首長の饗応、国内視察などのため必要な期間停泊したであろう。しかし、卑弥呼からの狗奴国との「相攻撃する状」の報告を受けて、これを解決するために帯方太守から派遣された塞曹掾史長政等は、水行の所要日数の十日は止むを得ないとしても、陸行の帯方郡治から海州までの二日、末蘆国から邪馬台国までの六日の併せて八日の日程についてはもっと短かったと考える。ことは急を要する事態で、一刻も早く「相攻撃する状」の現場に到着する必要があったからで最大限に急いだであろうからである。

(2) 戸数

倭国の戸数について考えてみる。「魏志倭人伝」に記されている国々の戸数は、対馬国が千余戸、一大国が三千余家、末盧国が四千余戸、伊都国が千余戸、奴国が二万余戸、不弥国が千余家、投馬国が五万余戸、邪馬台国が七万余戸で、総計十五万余戸（家）ある。このうち伊都国については、魚豨ぎよかんが表した『魏略』には、「戸万余」とされており、千余戸は万余戸の誤りというのが大方の考えであるが、本稿においては、「魏志倭人伝」の記述に従い、千余戸で考える。また、一大国の三千余家、不弥国の千余家の「家」についても「戸」と同様と考える。

当時は、一戸当たり五人程度が居住していたと推測されていることから、一戸当たり五人として、各国の人口を推測すると、対馬国が五千人、一大国が一万五千人、末盧国が二万余人、伊都国が五千余人、奴国が十万余人、不弥国が五千余人、投馬国が二十五万余人、邪馬台国が三十五万余人で、総計七十五万余人となる。このほかに、「魏志倭人伝」が国名のみを上げている二十一国があり、これらの国々の戸数を加えると、さらに大きな数値となることは容易に推測できる。この数値が、当時の人口としては大きすぎるのではないか、また、「魏志東夷伝」の高句麗、扶余などに比べても大きすぎるのではないかと虚妄の数値、あるいは過大に誇張されたものではないかとの考えがある。

「魏志東夷伝」の扶余、高句麗、沃沮、挹婁についてその国の範囲、戸数を上げると表3のとおりで、扶余、高句麗はいずれも方二千里可りの国の広さにそれぞれ八万戸、三万戸である。また、沃沮と濊は、国の広さは判明しないがそれぞれ五千戸、二万戸である。一方、韓は方四千里可りの広さに十四万五千戸、倭国は周旋五千余里の国の広さに十五万余戸以上の戸数がある。韓と倭国の戸数は「魏志東夷伝」に記された扶余、高句麗、沃沮及び濊の戸数に比べて際立って多いことが分かる。

表3 「魏志東夷伝」に上げる国々の広さと戸数

国名	国の広さ	戸数	推定人口 (戸数×5人)	備考
扶余	方2,000里可り	8万戸	40万人	魏志扶余伝
高句麗	方2,000里可り	3万戸	15万人	魏志高句麗伝
沃沮	南北長1,000里可り	5千戸	2万5千人	魏志沃沮伝
挹婁	記載なし	記載なし	—	魏志挹婁伝
濊	記載なし	2万戸	10万人	魏志濊伝
韓	方4,000里可り(5分の1にすると約方800里可り)	馬韓10万余戸 辰韓・弁辰4万5千戸 合計14万5千余戸(5	72万5千人(5分の1にすると14万5千人)	魏志韓伝

		分の1にすると9千余戸)		
倭国	周旋5,000余里 (5分の1にすると周旋約1,000余里)	15万余戸以上 (倭国21国は「以上」で示した)(5分の1にすると3万余戸)	75万人以上(5分の1にすると15万戸)	魏志倭人伝

注 「邪馬台国への径―「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう」(榊原英夫)を参考にして作成した。

この倭国および韓の国の広さ、戸数もまた「魏志東夷伝」の中の他の国々とは異なっているのではないかと考える。これらも実際の五倍になっているのではないかと考えるのである。この考えでいくと、倭国の国の広さ周旋五千余里は周旋千余里(後述(6)参照)、戸数十五万余戸は三万余戸となり、韓は国の広さ方四千里可りが八百里可りに、戸数十四万五千戸が九千余戸となる。ほぼ妥当な数値ではなかろうか。

倭国を構成する国ごとに戸数、人口を見ると対馬国は二百余戸、千人、一大国が六百余家、三千人、末盧国が八百余戸、四千余人、伊都国が二百余戸、千余人、奴国が四千余戸、二万余人、不弥国が二百余家、千余人、投馬国が一万余戸、五万余人、邪馬台国が一万四千余戸、七万余人で、総計三万余戸、十五万余人である。伊都国の戸数を万余戸としても二千戸、一万人となり、総計は三万千八百余戸、十五万九千余人となり、大きな相違はない。

なお、三十か国の連合国家である邪馬台国連合にはこのほかに、「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の倭国は遠絶にして得て詳らかにすべからず」と記し、「その余の倭国」として国名のみを上げている二十一か国があるが、これらについては、国名のみ列挙で何らの手がかりもない。これを徒に推計して数値をあげることは誤解を招くことともなるので、ここでは触れないこととする。おそらくこれらの国々は、それほど戸数、人口はなかったのではないかと考える。

(3) 婢千人を侍らす

「魏志倭人伝」には、卑弥呼は「王となりしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍らせしむ」と記されている。卑弥呼は婢千人を侍らして自らの世話をさせているのである。この婢千人について考えてみる。「隋書倭国伝」には隋代の倭国について「王の妻は雞弥と号す。後宮に女六、七百人あり。」とある。関東付近から九州までの広大な領域を版図に納めた当時の倭国の後宮の女人が六、七百人の規模である。単純に比較することはできないとは思いますが、既に統一国家を形成していた当時の倭国の後宮の女人が六、七百

人であるのに比べ、北部九州地域で、緩やかに連合していた三十国を統括していたにすぎない卑弥呼が侍らしていた婢の千人は多すぎるのではないかと考える。この数値も五倍程度に誇張されていたのではないかと考えるのである。試みにこれを五分の一にすると二百人規模となる。これでも多いような気はするが、千人規模よりは現実的な数値ではないだろうか。

(4) 径百余歩の冢^{ちやう}と殉葬の奴婢百余人

「魏志倭人伝」に記されている「卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人」の「径百余歩」と、「奴婢百余人」についても考えてみる。卑弥呼の死に当たって、直径百余歩の墓（冢）が造られ、奴婢百余人が殉葬したというのである。これも五倍に拡大されているのではないかと考えるのである。

この卑弥呼の墓の大きさについては、歩を当時の魏・晋の歩としてみると、一里は三百歩、一里は約四百三十四メートルであることから、一步は約一・四五メートルとなるので、百歩は約百四十五メートルとなる。「径百余歩」の冢とは、直径約百四十五メートルの円形の冢となるのである。当時の墳丘墓で直径約百四十五メートルの円墳は、浅学の身ではあるが、私は知らない。四十面を越える銅鏡など多数の副葬品が出土し、王墓として良く知られている伊都国の平原遺跡の1号墳でさえも東西十三メートル、南北十メートルの周溝に囲まれた墳丘墓である。直径約百四十五メートルの円墳は、桁が違う大きさで、このような円墳が存在したかどうか疑わしい。邪馬台国近畿説の研究者は、奈良県桜井市にある、後円部が直径百五十メートルの前方後円墳である箸墓を卑弥呼の墓と比定するのであるが、当時の中国、朝鮮半島においては、前方後円墳という特異な形状を持つ墓はない。倭国に派遣され、卑弥呼の墓の築造に遭遇した塞曹掾史張政等が、この特異な墓について、その報告書に書き記さないはずはなく、陳寿もこれを「魏志倭人伝」に記して、これを読む晋の皇帝や宮廷の官人等にその様子を伝えようとするはずであるが、そのような記述はない。

この「径百余歩」という数値も五倍に拡大されているとすると、「径百余歩」の冢は、約百四十五メートルの五分の一の約二十九メートル程度となる。卑弥呼の墓は直径が約二十九メートルの円墳となる。今まで発掘されていない巨大なものではあるが、ありえない大きさではない。古墳時代に築造され、これよりもはるかに巨大な前方後円墳を持ち出す必要はないのである。

また、「奴婢百余人」も二十人程度になるのである。殉葬については、当時の倭人の国々にその風習があったかどうかについては、これを証明する文献や考古学の史料はなく、明らかではないが、「日本書紀」の垂仁天皇の巻に、野見宿祢が殉死者を埋めることに代えて土で作った人形や馬（埴輪と考えられる。）を埋葬するように天皇に奏したとの記述があることから、殉葬の風習があったのではないかと考えられるが、定かではない。

(5) 更々相誅殺し当時千余人を殺す。

「魏志倭人伝」には、卑弥呼の要請を受けて帯方郡から派遣された塞曹掾史の張政が、邪馬台国と狗奴国との間の「相攻撃する状」を解決した後「更に男王を立てしも、國中服せず。更々相誅殺、当時千余人を殺す。」と記されている。卑弥呼の後に後継者として男王が立てられたが、國中がこれに服せず、争乱が起り、千余人が殺されたというのである。この場合の国とは邪馬台国（連合）を指すと考える。この千余人も五倍に誇張されているのではないかと考えるのである。そうすると千余人という数値は、実数は二百余人となる。この争乱は、邪馬台国（連合）の結束を揺るがしかねない問題であり、邪馬台国（連合）の宗主国である魏にとっては、威信にかかわる重大事態である。張政は全力を挙げて収束に努めたであろう。その結果、卑弥呼の宗女である壺与を立てることにより収束したのである。争乱はごく短期間で収束したと考えられるが、その間に二百余人が殺されたのであるから、かなり激しい戦いが繰り広げられたと考えられることに変わりはない。

（6）周旋五千余里

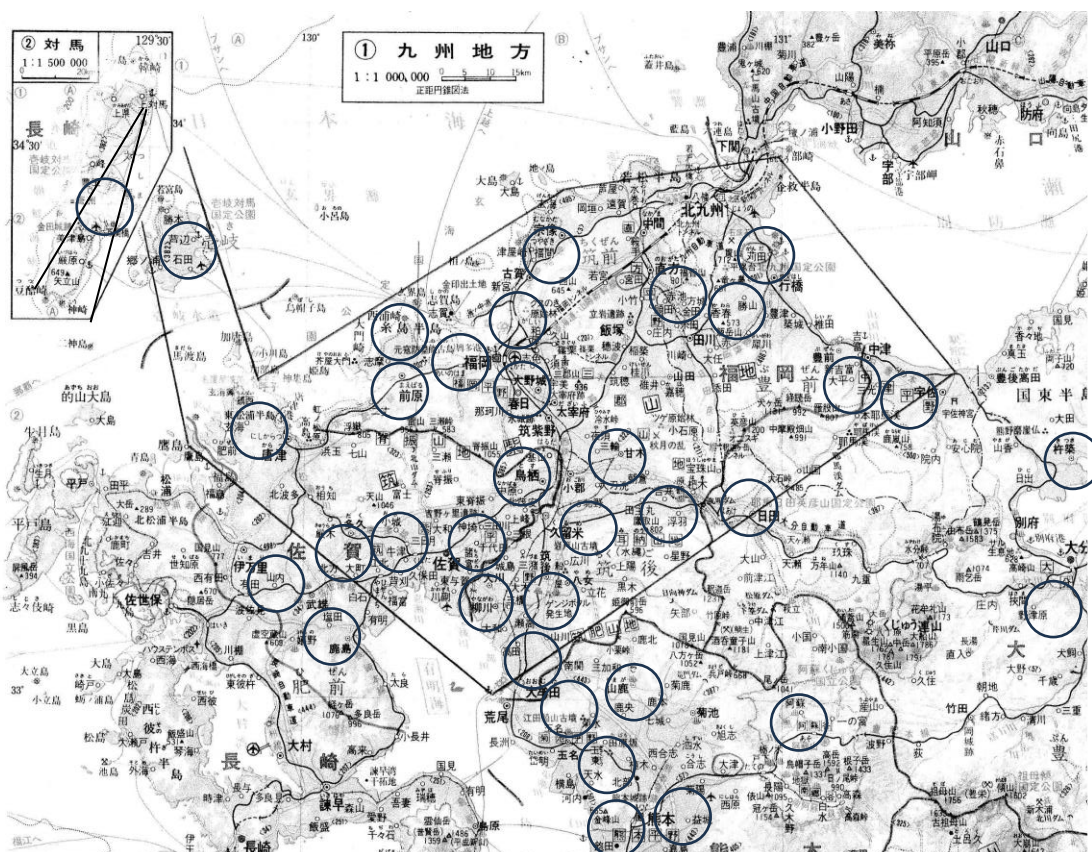
「魏志倭人伝」には、このほかにも数値で示されているものがある。「倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、あるいは絶えあるいは連なり、周旋五千余里ばかりなり。」である。倭の地を問うに、海中の洲島に遠くはなれて存在し、その洲島があるいは絶えあるいは連なって、周りをぐるっと回ると五千余里ばかりであると言っているのである。この五千余里についても考えてみる。五千余里は、一里を当時の魏の一里約四百三十四メートルとして考えると、約二千百七十キロメートルとなる。これは日本列島の北海道から九州までの距離約二千キロメートルに相当し、あまりにもおおきな数値である。これも五倍に拡大して理解されるように記載されているのではないかと考えるのである。五千余里を表2の一里を約八十六メートルとして試算してみると約四百三十キロメートルとなる。この約四百三十キロメートルが倭の地の一周の長さとなるのである。

因みに現在の地図上で測定してみる。倭と想定する北部九州の地を周回すると、極めて大雑把な測定であるが、次のような結果となった。なお、地点から次の地点までは便宜上直線で計算した。

- ① 長崎県対馬島北端付近から同県壺岐島を経て同県唐津市の呼子港付近までが約百二十六キロメートル、
- ② 唐津市呼子港付近から福岡県玄海町付近までが約七十キロメートル
- ③ 玄海町付近から福岡県北九州市門司区付近までが約四十三キロメートル
- ④ 北九州市門司区付近から大分県宇佐市付近までが約五十四キロメートル
- ⑤ 宇佐市付近から狗奴国との境界と考えられる筑肥山地西端の福岡県大牟田市付近までが約百十キロメートル
- ⑥ 大牟田市付近から長崎県松浦市鷹島町付近までが約七十六キロメートル
- ⑦ 松浦市鷹島町付近から壺岐島を経て対馬島北端付近までが約百三十四キロメートル
- ⑧ 合計約六百十三キロメートル

以上のとおり倭の地の周旋距離は約六百十三キロメートルとなる。約四百三十キロメートルより約百八十三キロメートル長く、一.四倍となるが許容範囲であろう。「魏志倭人伝」が記す倭の地は周旋五千余里という距離観は、「魏志倭人伝」に記されている里が五倍に拡大して理解されるように記されていると考えるとほぼ妥当なものであるといえるのではなかろうか。これを地図上に示すと図2のとおりである。

図3 周旋五千余里の範囲と国々



注 新詳高等地図（帝国書院）に、周旋五千余里の範囲及び高島忠平氏作成の弥生時代のクニ図を参考にクニ（○印）を書き加えた。

なお、「倭の地」の範囲は、女王卑弥呼の影響力が及ぶ邪馬台国連合の範囲と考える。倭人の国としては、このほかに、女王卑弥呼と対立する狗奴国がある。さらに、「倭の地を参問するに、(以下略)」の前段に「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり。また朱儒国あり。その南にあり。(中略) 女王を去ること四千余里。また裸国、黒齒国あり、またその南にあり。船行一年にして至るべし。」と記述された国々がある。これらの国々は、魏の冊封国ではなく、魏の影響力が直接には及ばない国々である。さらに、「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり」と「女王を去ること四千余里。また裸国、黒齒国あり」の距離を併せると既に五千余里となるなど、「周旋五千余里ばかり」の範囲に含まれるような

記述となっていない。繰り返しになるが、「周旋五千余里ばかり」の範囲は、魏の影響力が直接及ぶ冊封国である邪馬台国連合の範囲と考える。

3 「魏志倭人伝」の数値はなぜ誇張されているのか

(1) 陳寿の経歴

いままで見てきたように、「魏志倭人伝」に記されている数値は、読む人が実際の数値の五倍程度に誇張して理解するように仕込まれていると考えられる。なぜ「魏志東夷伝」のうち、「魏志倭人伝」に記されている数値は、誇張されているのであろうか。この理由を考える前に、「三国志」を編纂した陳寿の経歴及び魏・晋の国内事情を見てみたい。これが、数値が誇張されていることを解くヒントになると考えるからである。

陳寿は二三三年、四川省に生まれたと言われ、二九七年に没している。四川省は、当時、魏と対立していた蜀の本拠地である。陳寿は、蜀に仕えていたが、讒言により排斥されて失職している。蜀は二六三年に魏に滅ぼされたが、陳寿はこのためにその後も官職についていない。これを救ったのが、魏（二二〇～二六五年）の後を受けて司馬氏が建国した晋（西晋二六五～三一六年）に仕えていた、かつての同僚である羅憲である。羅憲は、陳寿の才能を高く評価しており、晋の官職に推薦した。陳寿はこれにより晋に仕えることとなり、「諸葛亮集」、「益州耆旧雜記」などを編纂した。これが張華に評価され、陳寿は晋の国史の編集や制作を司る修史官（著作郎）に抜擢され、「三国志」をも編纂することになるのである。しかし、母親が洛陽で死ぬと、その遺言により、洛陽に葬ったが、郷里の墳墓に葬るという当時の慣習に反するとして非難され、罷免されている。その数年後に太子中庶子に任命されたが、拝命しないまま死去した。

これからわかるように、陳寿は、晋の官吏であった羅憲、張華に見いだされ、晋に仕えているのである。魏・呉・蜀の歴史を編纂するとしても、曹操の死後、その一族の曹真、曹爽と権力を争った司馬懿を祖とする晋の官吏として、司馬懿の功績を高く評価する必要があったことは容易に察しが付く。しかも「魏志倭人伝」が編纂されたのは晋朝の時代であり、司馬氏一族が権力を握っていたのである。

なお、「三国志」は、当初は陳寿の私家本であったが、陳寿の死後、その評判が高く、張華が推挙したことで、正史として取りあげられることとなったものである。

(2) 魏・晋の国内事情と朝貢

当時の魏とその後に成立した晋との関係は極めて複雑である。魏は、その創始者である曹操の時から事実上、後漢の権力を掌握しており、この時から魏王朝とみることもできるが、曹操の子、曹丕が後漢の最後の皇帝・献帝から禅譲を受け、皇帝（文帝）となり、魏が成立（二二〇年）する。しかし、魏の国内事情は複雑で、曹操を始祖とする一族と魏の高官として武威を称えられた司馬懿を頂点とする司馬氏との勢力が激しく対立した。外征の功績のみならず、宮廷内部においてもたびたび陰謀や密告、粛清、クーデターが企てら

れ、これを切り抜けた司馬懿が、二四九年のクーデターで実質的な権力を握って、晋の礎を築き、二六五年に司馬懿の孫の司馬炎（武帝）が魏に代わって王朝を建てることになるのである。

一方、中国における朝貢は、周辺の夷狄が中国皇帝の徳を慕って朝貢を行い、皇帝がこれに対して恩賜を与えるという形式のものであるが、多くの、そしてできるだけ遠くの国が朝貢をすることは、皇帝の徳の高さがより高いことを示していると考えられており、これが中国国内に政権の正統性を示すことにもなるのである。

魏においては曹操の一族の曹真、曹爽が西域諸国に積極的に進出し、朝貢工作を行い、多くの国々が朝貢してきていたにも関わらず、「三国志」には西域に関する「西域伝」がない。ちなみに陳寿が参考にしたといわれる、魚豢の「魏略」には「西戎伝」がある。曹操の一族の曹真は西域辺境を守備するとともに、西域諸国の、魏への朝貢工作を積極的に行った。これにより、焉耆（カラシャール）、于闐（ホータン）、鄯善（楼蘭）、龜茲（クチャ）さらには大月氏国（クシャン国）などが朝貢に訪れている。なかでも大月氏国は、紀元九十年に七万の大軍をもって後漢と戦って敗れたこともある大国で、二世紀の半ばにはカニシカ王が東西トルキスタン、アフガニスタン、パキスタン、北インドに至る大帝國を建設している。この国が二二九年に魏に使節を派遣した。時の明帝は大いに喜び、これに「親魏大月氏王」の称号を与えている。そしてこれは、大月氏国が、大月氏国の思惑とは別に魏の冊報国として蜀を後方から牽制することが期待されているのである。

一方、司馬懿は、西南の蜀に対する戦線を担当していたが、諸葛亮が五丈原において病死したため、西南方面の脅威がなくなると、東方に勢力を張っていた公孫氏の討伐を命じられ、これを滅亡させる。さらにこの時に副将であったに毋丘儉が東北辺境の扶余、挹婁、沃沮、濊、高句麗等を討伐して東北地方に足場を築いた。これにより遼東地方から朝鮮半島北部が魏に服することとなり、司馬懿は東北地方から朝鮮半島北部に勢力を伸ばし、韓諸国、倭国などが朝貢することになるのである。倭国は司馬懿が公孫氏を滅亡させた翌年の二三九年には使節を帯方郡に派遣し、朝貢を求め、魏から卑弥呼が「親魏倭王」の称号をあたえられるのである。この倭国の朝貢が、司馬懿の功績を宣伝するために大月氏国に対抗する、はるかな遠方の国、大きな国として、そして、呉を東方から牽制することが期待される国として、「魏志倭人伝」に記載されることになるのである。

4 終わりに

本稿では、「魏志倭人伝」に記されている帯方郡から邪馬台国までの行程（里数、日数）を中心に、さらにこのほかの戸数、百余歩の冢、周旋五千余里など数値に関する記述を考えてきた。この結果、「魏志倭人伝」に記されている数値の多くは、「魏志倭人伝」を読んだ晋の皇帝、宮廷人、知識人らが五倍に拡大して理解するように記されているのではないかと考えられることが判明した。このことを理解して「魏志倭人伝」を読めば、里程、戸数、冢の大きさなど、これまで問題にされてきた数値がいくらかでも現実に近いものとな

ることが判明する。「魏志倭人伝」に記されている数値に関する記述は、虚妄でもなければ、理解できない誇大な数値でもないのである。何故に陳寿が「三国志」の中でも「魏志倭人伝」にこのような仕掛けを行ったかを考えれば理解できるのである。この数値の仕掛けは「魏志韓伝」にもみられるが、「魏志東夷伝」のうち「魏志倭人伝」と「魏志韓伝」以外には見られない。この二つについては陳寿が意図してこのような仕掛けを行ったことは間違いないであろう。

なお、このことは倭国と韓の国内の事情に関する記述のみであって、魏に関わる記述には仕掛けられていない。すなわち、卑弥呼から魏への貢物の数である男生口四人、女生口六人など、魏の明帝が卑弥呼に下賜した物品の数量、絳地交竜錦五匹、絳地縹粟罽十張、蒨絳五十や銅鏡百枚、真珠・鉛丹各々五十斤などである。これらの数値については、晋の皇帝、宮廷人、知識人らには既知のことがらであり、誇大に理解させる必要もなく、現実の数値がそのまま記述されていると考える。

(参考文献)

- 石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝(1)」岩波文庫 (株)岩波書店 1951年
- 全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」 講談社学術文庫 (株) 2011年
- 今鷹真・小南一郎訳「正史 三国志4」 筑摩学芸文庫 1993年
- 榊原英夫 「邪馬台国への径―「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう」 海鳥社 2015年
- 遠澤 葆 「魏志倭人伝の航海術と邪馬台国」 (株)成山堂 2003年
- 松本清張 「古代史疑」 中央公論社 1968年
- 著者代表 樗木昇一 「新福岡県の地理」 光文館 1974年
- 奥野正男 奥野正男著作集I 「邪馬台国はここだ―吉野ヶ里はヒミコの居城」 梓書院 2010年
- 塩田泰弘 「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」 「季刊邪馬台国 131号」 梓書院 2016年
- 片岡宏二 「邪馬台国論争の新視点―遺跡が示す九州説―」 (株)雄山閣 2011年
- 河本芳昭 「東アジア古代における諸民族と国家」 汲古書院 2015年
- 高島忠平 「邪馬台国は何処に」 朝日カルチャーセンター福岡講座資料 2013年後期
- 帝国書院編集部編 「新詳高等地図 初訂版」 帝国書院 2000年
- その他多数

塩田 泰弘 (しおた やすひろ)

熊本県生まれ

平成 24 年退職時に友人から勧められて大学の古代史に関する公開講座を受講し

たことが契機で、従来からの古代史好きが高じてのめり込む。現在、大学の公開講座、カルチャーセンターの講座、講演会等に通い、諸先生の著書を購読するなど勉学に勤しんでいる。

論文「魏志倭人伝からみた邪馬台国概説」（「季刊 邪馬台国」126号）、「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」（「季刊 邪馬台国」131号）」がある